



曾禰達蔵

Tatsuzo Sone

用を超え時代を超えて生き残っている建築がある。

その一方で、初期の目的を果たしただけで、

あるいは機能や形がもう時代にそぐわないという理由だけで、

いとも簡単に取り壊されてしまう建築もある。

省資源、省エネルギーと声高に叫ばれている昨今、

寿命の長い建築こそ、その目的を達成しているとは言えないだろうか。

「生き続ける建築」には、それだけの理由と多くの注目すべき教示が隠されている。

1回目は、曾禰達蔵。辰野金吾と並ぶ工部大学校の第1回生。

現在なお多くの作品が残されている。

生涯“新しい建築”をつくり続けた建築家 曾禰達蔵

平井ゆか

YUKA HIRAI

ひらい ゆか—内田祥哉建築研究室／1992年、明治大学工学部建築学科卒業。1994年、同大学大学院工学研究科建築学専攻博士前期課程修了。現在、曾禰達蔵と曾禰中條建築事務所について研究している。作品：武蔵大学8号館（2002）、顕本寺本堂（2003）の一部を担当。著書：『内田賞顕彰事績集「日本の建築を変えた八つの構法」』（内田賞委員会事務局 2002）の一部を担当。

今から約90年前、東京駅の正面、皇居を望む一角に、日本で最初の近代的高層オフィスビルが誕生した。「東京海上ビルディング」（1918）。設計は国内最初期の設計事務所、曾禰中條建築事務所。戦前の我が国において最大といわれ、作品の質も最良といわれるほど定評があった事務所である。構造を担当した若き日の内田祥三^{〔*1〕}と共に作り上げた、7階建てのオフィスビル。「ビルディング」という名称も、この時使われたのが最初だった。日本人の設計、施工で建ったその白亜の建物は、当時の日本の建築界に大きな衝撃と自信を与えたという^{〔*2〕}。昭和40年代に時代の波にのまれ建て替えられたが、優美さも兼ね備えつつ、関東大震災でもびくともしないほど、堅牢な建物だった。

その曾禰中條建築事務所の主宰、曾禰達蔵は、工部大学校造家学科（現・東京大学工学部建築学科）でジョサイア・コンドルに西洋建築を学び、明治12年（1879）第1回生として卒業した、日本人初の建築家の1人である。温厚、実直な人柄で皆に慕われ、同期で同郷の友、辰野金吾の活躍を常に支える存在だったともいわれる^{〔*3〕}。江戸に生まれ、明治、大正、昭和と激動の時代を生き抜き、85年の生涯を閉じるまで現役で設計し続けた曾禰達蔵は、日本の建築界の開拓世代として、何を考え、何を成したのか。作品を通して、その生涯を振り返ってみたい。



国内初のオフィス街

卒業後、工部大学校助教や海軍省を経て、明治23年（1890）、三菱による日本で最初の街区計画^{〔*4〕}、丸の内の建築計画が立ち上がると、曾禰は恩師コンドルの推薦により同社の建築士として迎えられた。陸軍省から払い下げられた丸の内の8万余坪の土地の都市計画と建築計画を担当し、その実施に従事する。まず、丸の内全域の実測と、当時まだ珍しかったボーリングによる地質調査に取り組み、「近代高層建築には不向きな地質」^{〔*5〕}という結果を得て、建築工事に非常な苦心を払っていく。

「三菱一号館」（1894）は建築顧問コンドルの設計、曾禰の監督で建設された。竣工間近にかなりの地震があった際、足場の上にあった曾禰は我が身より建物を案じ、もし崩れ

たらその中に身を投じる覚悟をしたという^{〔*6〕}。「三菱二号館」（1895）、「三菱三号館」（1896）はコンドルと共同設計。「三菱四号館」（1904）以降は一任され、海外視察で得た知識、最新の技術を取り入れながら「三菱七号館」（1904）までつくり上げた^{〔*7〕}。

丸の内には、皇居の正面に近代オフィス街を建設し、東京の美観と新興日本の文明を内外に知らしめようという、当時の三菱の社長・岩崎弥之助と、管事・荘田平五郎の想いがあったという^{〔*8〕}。そのため、耐火、衛生、都市の美観を考慮した非木造洋風建築に限定し、高さも揃え、恒久的な都市計画をもって建設が進められた。こうして出来た赤煉瓦街「一丁倫敦」は、国際社会に仲間入りした日本の発展の象徴となった。

その後、曾禰は自身の事務所も丸の内に設け、東京駅と皇居を結ぶ行幸通りの両側に、代表作となる「東京海上ビルディング」や「日本郵船ビルディング」（1923）などを次々と設計し、一大ビジネス街づくりに大きく貢献した。



曾禰中條建築事務所

曾禰は丸の内の他にも三菱関係の建築を手がけ、神戸の「東京倉庫会社兵庫出張所（現・石川株式会社）」（1905）など、今も大切に使われている。

明治39年（1906）に三菱を定年退職すると、曾禰は単独で設計事務所を開き、約1年後の明治41年（1908）1月には16歳下の中條精一郎と共同で曾禰中條建築事務所を開設する。

2人は共に遅咲きの建築家で、海外で開催された万国建築家大会に、国の代表として出席した共通の経験を持つ。学究肌で良いものをつくるためなら予算も度外視してしまう曾禰に対して、デザインだけでなくマネージメントにも長けていた中條は、曾禰にとってなくてはならないパートナーだったと考えられる。

事務所には高松政雄や、徳大寺彬麿などの優秀なデザイナーが集まった。創設当時からの中條は、尾山貫一によると、設計に着手する際には、曾禰は自ら案を練って全容を把握し、基本的指針を必ず指示したという^{〔*8〕}。

新語も読めるようにと、晩年まで英字新聞で英語の修練も欠かさず、仕事の合間には国内外の建築雑誌から新建材のカタログまで精読し、事務所でも回覧した。新しい建物の案内があれば必ず見学し、所員にも勤務時間を割いて見学を許したという^{〔*8〕}。

また、最善と思われる海外の最新技術はいち早く試み、納得がいくまで何度も実験を繰り返し、日本に適する確信が得られると、すぐ作品に活かしていった。責任感も強く、関東大震災の時には、余震もまだ激しい中、手がけた建物の中をくまなく点検して皆を驚かせたという^{〔*8〕}。

昭和11年（1936）1月に中條が、翌年12月には曾禰が亡くなり、曾禰中條建築事務所は30周年を目前に幕を閉じるが、国内で初めて地下鉄の駅とビルが融合した「明治屋ビルディング（現・明治屋本社京橋ビル）」（1933）を始め、オフィスビル、銀行、学校、会館、病院、最先端の技術を要する工場から住宅まで、さまざまな建築を手がけ、約230もの作品をつくり上げた。民間の仕事に従事し^{〔*9〕}、現在につながる新しい建築家と設計事務所の原型をつくった。



慶應義塾創立五十年記念図書館

曾禰中條建築事務所の作品の中で、現存する最も有名な建物といえば、国の重要文化財、「慶應義塾創立五十年記念図書館（現・慶應義塾図書館旧館）」（1912）だろう。

この依頼を受けたのは、曾禰が単独で設計事務所を開いた時だった。同校が創立50年記念事業として念願の図書館建設を決定してすぐ、当時同校の評議員会議長だった荘田平五郎からの推薦もあり、設計者は曾禰達蔵に決まったという^{〔*10〕}。三菱での永年の仕事で、曾禰は荘田の厚い信頼を得ていた。また、当時の在校生によると、同校は曾禰を「人格最も高く一世の師表と仰がれる人」と評し、「建築に限らず、およそ人間の仕事はこれに携わる者の精神をおのすから表現するものであるから、まず第一に修養に心がけよ」と訓示したという^{〔*11〕}。

曾禰は期待に応えるべく中條とともにさまざまな案を提示し、「何か変わったもの」をとの同校の要望に最後に提案したゴシック案が採用された^{〔*10〕}。

戦争で慶應は最大被災校となったが、最初に復興に着手したのが、シンボルのように愛



一丁倫敦

〔*6〕内田祥三「曾禰先生を憶ふ」『曾禰達蔵 中條精一郎 建築事務所作品集』（黒崎幹男編、中條建築事務所1939）

〔*7〕『三菱地所（別冊 新建築 日本現代建築家シリーズ15）』1992（建物の名称としては7号館まで手がけているが、建設年は5号館の方が遅く、年代を基準にすれば5号館まで手がけたといえる）

〔*8〕尾山貫一「先生を憶ふ」『曾禰達蔵 中條精一郎 建築事務所作品集』（黒崎幹男編、中條建築事務所1939）

〔*9〕国営の仕事は手がけていないが、公営の建物としては「鹿児島県庁舎（現・県政記念館）」（1925）と「県会議事堂」（1925）の2棟と共進会などの建築を設計している

〔*10〕『慶應義塾図書館史』（慶應義塾大学三田情報センター 1922）

〔*11〕阿部章蔵「曾禰先生追憶」『曾禰達蔵 中條精一郎 建築事務所作品集』（黒崎幹男編、中條建築事務所1939）



上—慶應義塾創立五十年記念図書館 玄関広間 内部で最も当初の姿をよく残す空間。秩父産緑色大理石の柱と、3連の尖頭アーチをくぐり、閲覧室へ階段を上る。正面にそびえる、小川三知の最初期の大作(復元)、「ペンは剣よりも強し」を表したステンドグラスから、華やかに日が差し込む
右ページ—同正面玄関付近の外観 赤煉瓦と花崗岩のコントラストが美しい。向かって右側には3階建ての八角塔があり、左側には書庫が並び

されていた、この図書館だった。他にも同校の建築を多数設計し、三田や日吉のキャンパスの校舎や、病院、幼稚舎など、今も現役で使用されている。

■ ■ ■ 曾禰の建てた住宅

曾禰は住宅も幾つか手がけている。三菱時代の作品には、三菱合資会社三菱造船所(現・三菱重工長崎造船所)の「占勝閣」(1904)がある。迎賓館として利用されているが、当初は、三菱造船所の社長宅として設計された。当時の社長は三菱から派遣された荘田平五郎であり、敬服する荘田のために、心を込めてつくった住宅といえる。瀟洒な木造住宅ながら、原爆からも山に守られ、100年以上の歳月が過ぎた今でも変わらず美しさを保っている。

事務所の作品には、華族や財界人の住宅や別荘が多く、普請道楽の施主が95歳の時に建てた洋館、「田中光顕伯爵小田原別邸(現・小田原文学館、登録文化財)」(1937)や、三菱財閥解体時の総帥・岩崎小弥太の終のすみかとなった「岩崎小弥太男爵熱海別邸(現在は三菱グループの保養施設)」(1935)、貴族院で活躍した小倉藩主、「小笠原長幹伯爵邸(現・小笠原伯爵邸；文化施設複合のレストラン)」(1927)などがある。

中でも特に印象的なのが、小笠原邸である。留学など、海外経験が豊富で、芸術にも造詣が深かった施主の趣向が反映された、本格的なスパニッシュ様式の本邸である。窓には、ステンドグラス作家の草分け、小川三知の最晩年の作品が、庭側の外壁には、「釉薬の天才」といわれた小森忍のタイルが花を添える。この作品には、他にはない、小森のつくった装飾性の高いオリジナル定礎銘板がある。建物の顔である喫煙室の下に付けられ、この作品に対する曾禰の思い入れの強さを感じられる。

建築家を目指す前、幕末生まれの曾禰は唐津藩の武士だった。16歳で明治維新を迎え、主君・小笠原長行、胖之助に従い戊辰戦争で戦場に身を置くが、公命で帰藩し一命を取りとめた過去がある。施主・小笠原長幹はかつての主君の本家に当たる家柄で、小笠原邸は曾禰にとってお殿様の家だった。

長く閉鎖されていたが、関東大震災直後に設計されたRC造で低層の建物は、今でも耐震性を保持していた[*12]。現在、PFIで借り受けている企業の社長は、初めてこの住宅を見た時、ロマンを感じたという。アンティーク家具を扱うように古材を最大限活かした修復が行われ、レストランとして蘇った[*13]。

■ ■ ■ 次世代への橋渡し

曾禰是最晩年に、新進気鋭の谷口吉郎とコラボレーションした作品もつくっている。その「慶應義塾幼稚舎」(1937)は、近年、日本における文化遺産としてのモダニズム建築「DOCOMOMO100選」に選定された。西洋建築を懸命に学んだ最初期の日本人建築家の中で、ただ1人モダニズム建築まで手がけた曾禰は、次世代の建築家への橋渡しを果たしたといえるだろう。

また、昭和3年(1928)、明治生命から新社屋設計の依頼を受けた曾禰は、指名コンペを提案し、当時を代表する後進の建築家や設計事務所8組を推薦したという[*14]。結果、岡田信一郎案が採用され、その案を最大限活かすため、当初隣接して残すはずだった、かつて手がけた旧館(「三菱二号館」)も取り壊した[*14]。着工後急逝した信一郎に代わって指揮した弟・捷五郎を支援し、現場にも足しげく通ったという。後にこの建物は、昭和建築で初めて国の重要文化財に指定された。自作ではないが、近代建築の記念碑的作品を後世に残したことも、曾禰らしい功績といえるのではないか。

曾禰は生前「歴史家になりたかった」とよく口にしたといわれる。家では漢詩や和歌をたしむ文学好きで、幕末に生まれ、激動の時代を生き抜いたことを思えばその気持も理解できるが、建築家になったことを悔いていたようにも聞こえる。本当にそうなのか。今回、改めて曾禰の一生を追い直してみ、果敢に新技術に挑戦し、常に最良のものを求め、生涯「新しい建築」をつくり続けた曾禰達蔵は、本人も気づかないうちに、建築に魅了されていたように思えてならない。

最初期の他の建築家と違い、曾禰は国を飾る建物はつくらなかつた。が、一建築家として「新しい建築」を追い求め、実際につくることで、日本の建築界を牽引しようとしていたのではないだろうか。✦(写真・図版解説ともに筆者)



慶應義塾幼稚舎(1937)

[*12] 再利用に伴う改修が行われた部分で1ヵ所だけ隔壁を除去し、そこには耐震補強工事が施されている
[*13] 所有する東京都がPFIで借受企業を公募し、選ばれたインターナショナル青和が2年かけて修復。2002年から「小笠原伯爵邸」という名称のレストラン(文化施設複合)として再利用されている
[*14] 「明治生命保険株式会社六十年史」(明治生命保険(株) 1942)

■ ■ ■ 慶應義塾創立五十年記念 図書館

[建築概要]

所在地：港区三田2-15-45
規模：地下1階、地上2階、一部3階
構造：煉瓦造、一部RC造(増築部分)
竣工年：1912年
改修及び書庫増築：1926~28年





正面玄関上部の庇 鉄製の装飾が美しく、葡萄棚から日が差すようにデザインされている。修復の際に安全性などから材質が変更されたが、当初はガラスはめられ、青空も透かして見えた

小笠原長幹伯爵邸

【建築概要】

所在地：新宿区河田町10-10
 規模：地下1階、地上2階
 構造：RC造
 竣工年：1927年
 修復・改修年：2001～03年

喫煙室内観 邸内最大の見せ場であり、唯一イスラム風の重厚な装飾が施された部屋。大理石でイスラム独特の幾何学模様を描かれた床や柱、漆喰彫刻に彩色された壁など、長年の汚れを除去し、当初のまま使用されている。家具は竣工写真を元に復元されたもの



左—正面外観 エメラルドグリーンのスペイン瓦に、クリーム色の掻き落し仕上げの外壁、窓には鉄製のグリルが設けられており、スバニッシュ様式の特徴をよく表したデザインになっている
 右—喫煙室外観 オリジナル定礎銘板が窓下に取り付けられている。「生命の讃歌」を表した上部の装飾タイルと共に、小森忍の作品



客室内観 正面のガラス扉で喫煙室につながる部屋。窓には小川三知による、小花を吹き寄せたようなステンドグラスが、しめ直して使用されている。当初の象牙色に復元された柱の上部には、果実や小花があふれんばかりに盛られたかごがデザインされている



定礎銘板





旧営業室内観 吹抜けに回廊が設けられ、天井の石膏レリーフや、大理石張りのカウンターなど、当初からの姿をよくとどめている。ごく最近まで現役の銀行として使われていたが、統廃合によって地元の企業が新しい持ち主となった。この雰囲気を活かした再利用が期待される

旧営業室2階の柱頭装飾 照明も当初からのものが使われている



三井銀行 小樽支店

【建築概要】

所在地：小樽市色内1-3-10

規模：地下1階、地上2階

構造：SRC造

竣工年：1927年

正面外観 花崗岩張りの落ち着いた外観に、繊細な軒蛇腹の装飾が優美な印象を加えている。小笠原伯爵邸と同じく関東大震災直後の設計で、耐震性を重視したつくりになっている。かつて繁栄を極めた小樽には、この建物を始め、工部大学校第1回生4人のうち3人の作品が現存している。
曾瀬中條建築事務所は、他にも三井銀行を手がけ、「同名古屋支店」（1935）と「同大阪支店」（1936）が今も地元のランドマークとして親しまれながら、現役で使用されている





1



2



3



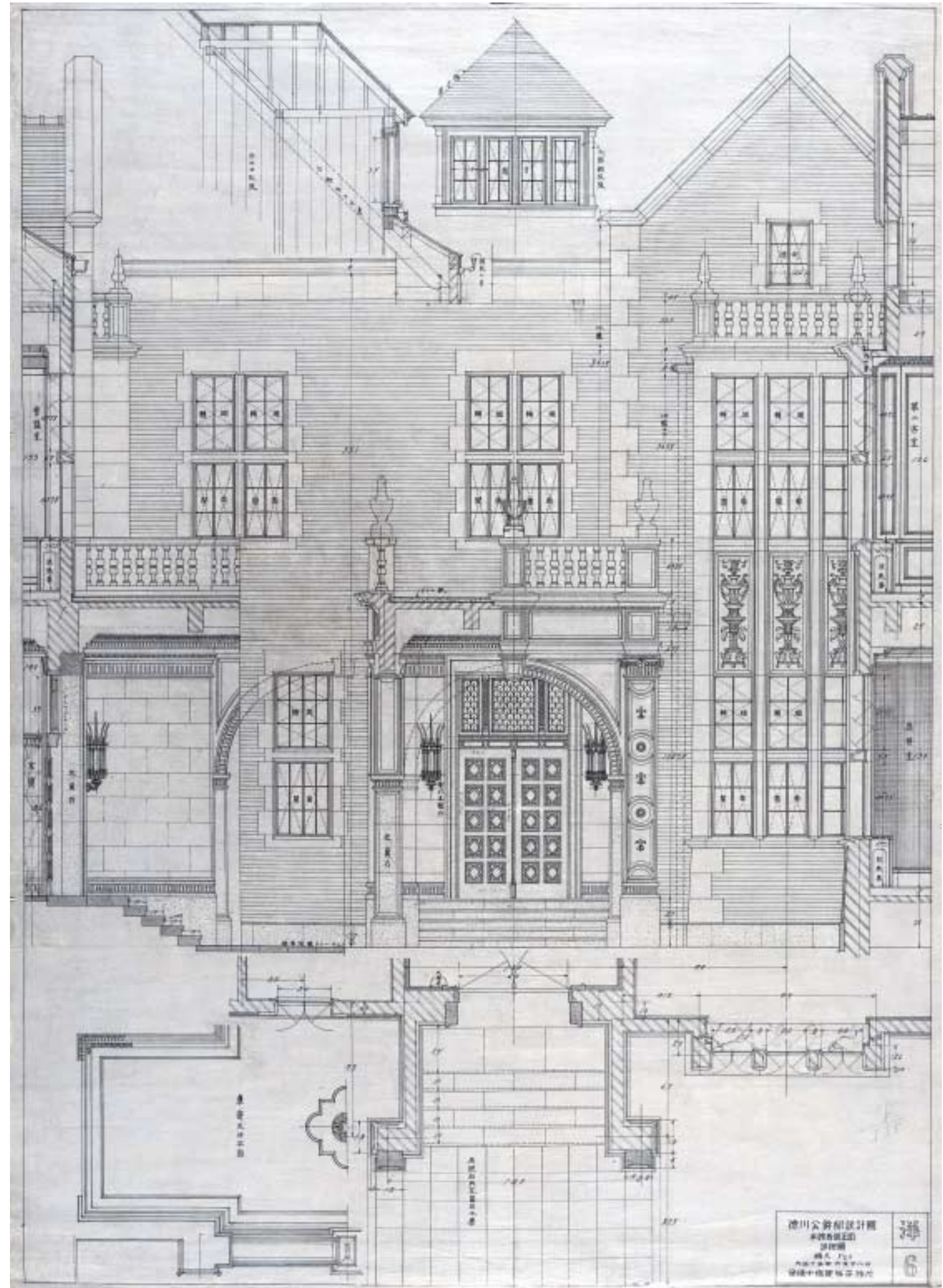
4



5

1~5—池田成彬大磯別邸 内観 (1)、同庭側外観 (2)、同正面外観 (3)、同内観 (4)、同庭側外観 (5)
6—徳川家達公爵邸 本館詳細図

[解説] 1~6は、すべて曾禰中條建築事務所の図面である。1~5は、かつての三井銀行総帥・池田成彬氏の大磯別邸(1932)のペースで、画用紙のような紙に描かれ、絵の具で着色されている。施主にイメージしやすいペースでいろいろな案を提示し、デザインを決定していった様子が伺われる。6は、徳川家宗家・徳川家達公爵の本邸(1928)の図面で、トレーシングクロスという、織布を塗料でコーティングした用紙にインキングされている。本館と呼ばれる洋館の正面玄関・車寄せまわりの詳細図だが、複数の図を1つの図面の中に構成し、1枚の絵のように美しく仕上げている。本館は主に接客空間で、背後に広大な和館が展開していた。その広さは、この敷地に現在、東京体育館が建つことから想像できるだろう。



6

曾禰達蔵 人と作品

1852-1937

略歴

- 1852年(嘉永5) 江戸唐津藩邸に生まれる
- 1879年(明12) 工部大学校造家学科(現・東京大学建築学科)卒業(第1回生)、工部省に入る。工学会(現・社)日本工学会)創立に参加
- 1881年(明14) 工部大学校助教授
- 1886年(明19) 海軍省に入り、鎮守府の建築委員になる。造家学会(後の建築学会)創立発起人
- 1890年(明23) 呉鎮守府建築部長。三菱社に入社
- 1893年(明26) シカゴ博覧会及び万国建築家会議出席(日本初参加の代表として)のため渡米
- 1899年(明32) 工学博士
- 1901年(明34) 岩崎久弥に随行しロンドンへ出張
- 1903年(明36) 建築学会(現・社)日本建築学会)建築語彙編纂委員会会長
- 1906年(明39) 三菱社を退社、同社建築顧問となる。建築事務所開設。建築学会東京市建築条例起稿委員会会長
- 1908年(明41) 中條精一郎と共に曾禰中條建築事務所を開設(国内最初期、後に戦前で最大規模の設計事務所となる)
- 1918年(大7) 建築学会会長、臨時議院建築局顧問
- 1920年(大9) 暖房冷蔵協会(現・社)空気調和・衛生工学会)会長
- 1921年(大10) 建築学会名誉会長
- 1936年(昭11) 共同経営者の中條が逝去
- 1937年(昭12) 逝去(85歳)

主な作品

- 1894年(明27) ・三菱一号館(東京)(設計:J.コンドル、監督:曾禰達蔵)
- 1895年(明28) ・三菱二号館(東京)(J.コンドルと共同設計)
- 1896年(明29) ・三菱三号館(東京)(J.コンドルと共同設計)
- 1900年(明33) ・三菱銀行神戸支店(兵庫)
- 1904年(明37) ・三菱四・六・七号館(東京)、占勝閣(長崎)
- 1905年(明38) ・三菱五号館(東京)、東京倉庫会社兵庫出張所(兵庫)
- 1908年(明41) ・明治屋門司支店(福岡)、東京電気(株)第1号・第2号工場(神奈川)
- 1909年(明42) ・東京電気(株)第3号工場(神奈川)、東京堅鉄製作所(東京)、高田商会銀座売店(東京)
- 1910年(明43) ・新潟銀行東京支店(東京)、東京電気(株)第4号工場(神奈川)
- 1911年(明44) ・明治屋京都支店(京都)、明治生命保険(株)長崎支店(長崎)
- 1912年(明45) ・新潟貯蓄銀行本店(新潟)、慶應義塾創立五十年記念図書館(東京)
- 1912年(大1) ・米井商店大阪支店(大阪)、米井商店神戸支店(兵庫)
- 1913年(大2) ・佐賀県唐津公会堂(佐賀)、新潟貯蓄銀行東京支店(東京)
- 1914年(大3) ・新潟商業銀行本店(新潟)、明治火災保険(株)京都支店(京都)、東京瓦斯(株)大森製造所(東京)、日本郵船(株)大阪支店倉庫・増築(大阪)、豊国銀行京橋支店(東京)
- 1915年(大4) ・慶應義塾大学大講堂(東京)、富士見町教会・改修(東京)、日本郵船(株)名古屋出張所(名古屋)
- 1916年(大5) ・芝教会(東京)
- 1917年(大6) ・日本弘道会館(東京)、東京高等商業学校御大典記念図書館(東京)

- 1918年(大7) ・日本郵船(株)神戸支店(神戸)、慶應義塾大学天現寺寄宿舍(東京)、東京海上ビルディング(東京)
- 1919年(大8) ・横浜商品倉庫(神奈川)、日本郵船(株)大阪支店(大阪)、如水会館(東京)、左右田銀行青山支店(東京)
- 1920年(大9) ・内外興業(株)芝浦工場・倉庫(東京)、明治生命保険(株)仙台支店(宮城)、日本郵船(株)神戸支店倉庫(神戸)
- 1921年(大10) ・慶應義塾大学医学部校舎(東京)、明治屋八丁堀倉庫(東京)、四谷職業紹介所(東京)
- 1922年(大11) ・有楽館ビルディング(東京)、札幌独立基督教会(北海道)、東京自治会館(東京)
- 1923年(大12) ・明治屋福岡支店(福岡)、キリンビール銀座売店(東京)、日本郵船ビルディング(東京)、両羽銀行本店(山形)
- 1924年(大13) ・明治生命保険(株)大阪支店・改修(大阪)、山形貯蓄銀行本店(山形)、明治屋大阪支店(大阪)、慶應義塾大学医学部看護婦寄宿舍(東京)
- 1925年(大14) ・東京府立実科工業学校(東京)、鹿児島県庁舎(鹿児島)、県会議事堂(鹿児島)、百三十三銀行本店(滋賀)
- 1926年(大15) ・慶應義塾監局(東京)、慶應義塾大学医学部食養研究所(東京)
- 1927年(昭2) ・明治屋金沢支店(石川)、三井銀行小樽支店(北海道)、小笠原長幹伯爵邸(東京)
- 1928年(昭3) ・救世軍本営(東京)、慶應義塾創立五十年記念図書館・増築、東京府医師会下谷病院(東京)、徳川家達公爵邸(東京)
- 1929年(昭4) ・慶應義塾大学医学部予防医学教室(東京)、救世軍浅草病院(東京)、東京基督教青年会館(東京)
- 1930年(昭5) ・東京海上ビルディング新館(東京)、三越新宿支店(東京)、明治屋横浜本店(神奈川)、両国ビルディング(東京)
- 1931年(昭6) ・東京計器製作所(東京)、千代田生命保険相互会社北海道支部(北海道)、東亜企業(株)鎌倉倶楽部(神奈川)
- 1932年(昭7) ・日本弘道会館(東京)、全国神職会館(東京)、慶應義塾大学医学部病院別館(東京)、池田成彬大磯別邸(神奈川)
- 1933年(昭8) ・明治屋ビルディング(東京)、大日本雄弁会講談社(東京)
- 1934年(昭9) ・日本精工(株)(東京)、慶應義塾大学日吉予科第一次校舎(神奈川)
- 1935年(昭10) ・三井銀行名古屋支店(愛知)、岩崎小弥太男爵熱海別邸(静岡)、國學院大学講堂(東京)
- 1936年(昭11) ・慶應義塾大学日吉予科第二次校舎(神奈川)、三井銀行大阪支店(大阪)、明治屋八丁堀倉庫(東京)、共同ビルディング(大阪)、慶應義塾幼稚舎(東京)(谷口吉郎と共同設計)
- 1937年(昭12) ・慶應義塾大学学部校舎(東京)、小松製作所工場(石川)、田中光顕伯爵小田原別邸(神奈川)



工部大学校第1回生 3列目右が曾禰達蔵。その左下に斜めに辰野金吾、片山東熊、佐七次郎が並び(1915年頃)

取材協力・資料・写真提供

石屋製菓/小笠原伯爵邸/『旧工部大学校史料』(旧工部大学校史料編纂会編、虎ノ門会 1931)(p.14)/慶應義塾/社団法人日本建築学会建築博物館(p.13、表-4)/東京大学生産技術研究所藤森研究室(p.12)/三菱地所(p.5)(50音順)

【次号予告】

次号(10月20日発行)の「生き続ける建築」は伊東忠太です。

*特に明記のない写真は、2006年4~7月に新規撮影したものです。